

教育経済建設常任委員会行政視察報告書

小林 貴 浩

○山形県南陽市

シェルターなんようホール（南陽市文化会館）について

【所 見】

以前、先輩議員と別の視察で訪れた南陽市で、偶然市民会館の建てかえが完成し運営されていると聞き、本市の市民会館の建てかえに必ず参考になると感じていた「シェルターなんようホール」は、旧市民会館が昭和43年に建築され、席数が716席、バリアフリー未対応、駐車場が狭く利用もしづらく、耐震性も不安視されていたことを受けて、東日本大震災を契機に全国初となる地元木材を使用した1,700席を保有する大型木造耐火の文化ホールとして、平成26年度に完成した。

当時の市長のかけ声で建設委員会を設置し、市民懇談会や林野庁所管、森林整備加速化補助事業採択などトップセールスで検討委員会設置から約2年半という速さで工事着手する事業であった。説明員が特に強調したのが、役所の教科書どおりだったらできなかつたということである。説明の中で感心したのは、「宝塚歌劇団を呼べるホールを」を合言葉に、市長の強いリーダーシップにより専門家委員会を設置したことである。世界で活躍する音楽家の坂本龍一氏や尾崎豊を育てたプロデューサー等で構成し、「全国ツアーの興行を可能とするホールを」ということで16回図面を引き直し、完成に至ったと聞いた。結果、一流の音楽家が演奏したくなる設備の設置、耐火・防音などさまざまなニーズをクリアし、地元資源である木材を使用した世界初の木造文化ホールが完成した。こけら落としではミュージシャンの山下達郎氏がコンサートを行い大盛況で終わり、その後山下氏が担当するラジオ番組でシェルターなんようホールの音響のすばらしさを宣伝したことも相まって、世界のトップミュージシャンや当初の宝塚歌劇団が定期公演するなど脚光を浴びている。

本市の市民会館も早急に建てかえを検討しなくてはならない時期であり、老朽化、耐震、時代のニーズ等南陽市と同様の課題を抱えており、今後建てかえを検討する際の大きなヒントとなった。第一に市長のリーダーシップ。第二に誰にも真似できない建物と設備。第三に市民の理解。今回の視察は本市の市民会館建てかえだけではなく、公共施設最適化等にも大変参考になる視察であった。

○山形県米沢市

P F I 制度による市営住宅建替等事業について

【所 見】

米沢市塩井町団地は、昭和 41 年から 43 年度にかけて建設され、その後の住戸改善が行われず、狭あい・低層の集合住宅であり、老朽化が著しく進んでいることや駐車場設置されておらず、時代の変遷やニーズに対応できないことから早急に建てかえを行う必要性があり、米沢市では現地において段階的に建てかえ計画を策定した。

その整備については、設計、建設、工事整理及び維持管理に要するコスト縮減が課題となり、これらの課題に対応するため「米沢市行財政改革大綱集中改革プラン」を策定し、P F I 法に基づき事業を実施することとなった。

全部で 3 棟を P F I 方式で建てかえを行い、現在満室ということで内部を見ることはできなかったが、市営住宅としては洗練されたデザインと、集合住宅の機能としてごみ収集場所や自治会館など、高齢者見守り対策も施されており、魅力的な市営住宅と感じた。整備を行う際に以下の 3 点を重要視して、地元建設会社が選定された。第一に良質なサービスの提供及びコストの縮減。第二に周辺環境との調和。第三に地域経済の活性化等。加点方式で地元建設会社に決定したものの市営住宅という性質から応募が少なく、競争原理が働かない等課題も生じた事業ではあるが、コスト縮減、サービスの向上など当初の目的は達成された事業であった。しかしながら、全体的な事業費等、工夫次第ではさらなるコスト縮減ができたのではないかという疑問も残ったが、現地を見学した際、高齢者をサポートするライフサポートアドバイザーの方から話を聞き、シルバーハウジングの対応はサービス向上の視点で考えるとすばらしい取り組みと感じた。

本市においても、老朽化した市営住宅の課題克服にコスト縮減は必要不可欠であり、米沢市が今回取り組んだ P F I (B T O 方式、20 年間維持管理を含む。) は大変参考になった。